乳幼児突然死症候群(SIDS)に関する研究：最新(1987～1988年度)のSIDS関連文献の検討

仁志田　博　司

要約：本研究年度にIndex Medicus及び医学中央雑誌にみられたSIDS関連文献（和文７、英文86の計93、文献番号は1114～1206）について最新の動向を検討した。

SIDSの疫学研究においては、その発生頻度は従来と変わらず、また国別による差が著明であった。病因、病態においては特に新しい知見はみられないが、呼吸中枢の発達、適応、異常に研究の焦点がしぼられつつある。

見出し語：乳幼児突然死症候群、Sudden Infant Death Syndrome (SIDS), Apparent Life Threatening Event (ELTE)、呼吸中枢、ホームモニタリング

1．SIDSの疫学

スウェーデンの1984－1986年のSIDS発生頻度は0.94／1000birth、ALTEは0.46／1000（11.43)、ニュージーランドの4.3／1000（1151）など、これまでの報告とほぼ同様であった。英国Adinburghにおける1880年代の乳幼児死亡率は120／1000 live birthで、その７％が突然死であり、1980年代では9.4／1000で、その突然死の占める割合は22％であった。それらの約100年の間を経た突然死の年令分布および季節の分布をみてみると、驚くほど類似しており、SIDSは文明病ではなく昔から変わらずあったことが示唆されている。（1191)。またニュージーランドにおける乳児死亡率の1940年から1985年の年代的変遷をみてみると、他の年令群は明かな減少傾向にあるのに、SIDS好発年令の１～５ケ月の乳児死亡率が減少していないことおよび他の疾患が著明に減少している中で、SIDSはむしろ増加傾向にあることが示されている。（1151）日本の78大学における司法解剖例中、SIDSの占める割合は1984年度は15／3329(0.5％)、1985年度20／3150(0.6％)であった。（1159）しかし日本の正確なSIDSの疫学的調査はまだ不十分であると考えられている。その理由は相変わらずSIDSとされる症例の中に明かな他の原因、疾患によるものが多数含まれているからである。（1129、1131、1132、1187)。SIDSはheterogeneousなグループであり、早期発症群（４～19週、グループ１)、後期発症群（20～52週、

東京女子医科大学母子総合医療センター新生児部門

グループ2）の2つの年令別に分けて検討すると、各因子によって両群に明らかな差が認められ、いわゆるリスク因子によるSIDSのスクリーニングは後期発症群に有用であり、早期発症群には有用でないことが示唆されている。(1122)。SIDSの同胞が必ずしも従来言われていた如くSIDSのリスクが高くないという最近の報告に対し、母親の出産年令を考えればやはりSIDS同胞はハイリスクであるという意見が述べられている。

2．SIDSの病因、病態

既に過去に検討された、感染（1140、1168）、代謝異常（1165、1187）、DPTとの関連（1117）、鉛中毒（1137）、先天性銅欠乏症（1169）、胃食道逆流症（1174、1188）、うつ伏せ寝との関係（1138、1186、1189、1194）等であるが、その中で興味のあるいくつかを取り上げる。CSF中のβ－enetorphin immunoreactivityがALTE群に高いことからSIDSの病因との関係のみならず、それをSIDSやALTEのハイリスクスクリーニング、さらにはopioid antagonistによる治療の可能性が述べられている。(1126)。これに関連し、人工乳中に含まれるcaseinがcasemorpinに代謝されopioidとしてSIDSの発症に関与するという意見は、人工乳栄養児にSIDSが多いことと結びつけて興味ある。(1135)。ネズミの致死的仮死を引き起こす実験による病理所見はSIDSに類似しており、また仮死に対するtoleranceが日令が進むにつれて低下することより、SIDSの好発年令が生後1～2ケ月を過ぎてからであることと兼ね合わせて興味あるコメントが述べられている。(1120)。catecholamine synthesizing enzymeであるphenylethanolamine-N-methyl-transferase(PNMT)およびdopamine-beta-hydroxylase(DBH)がSIDS児群の脳幹部において、コントロール群より著明に低下していることより、SIDS群においてはmedullary areaにおけるcathecolamine産生能力に異常があり、それが中枢性呼吸コントロールに異常を来している可能性があることが示されている。(1170)。呼吸調節の異常に関しては静かな呼吸の時に呼吸のバラツキの程度（respiratory band）がSIDS群で大きいことより、autonomic instabilityが存在することが示唆されている。(1155)。更に興味ある意見は、実験やデーターに基づかない仮設ではあるが、生後2～4ケ月の言語発達の過程でそれまでの脳幹中心であったinvolantaryな呼吸コントロールが大脳皮質も関与するvolantaryコントロールに変わってくることが、この時期に呼吸の異常を来たしSIDSが好発する年令となることに関与する、というものである。(1197)。同じ著者は更に乳児の呼吸のパターンは、両親と一緒にいることによって影響を受けるという考察から、一人寝と両親と添い寝をする子供とでは、呼吸のパターンが違うことを述べており、一人寝にSIDSが多いことと関係づけている。(1197)。このことはアジア地域でSIDSが西欧諸国より極めて少なく、香港においてはSIDS発生率が0.05／1000と極めて低く、その考察において人種差のみでなく、家族と児が一緒にいることが関与すると述べられていることと併せて興味深い意見である。(1201)。

3．SIDSハイリスク児のスクリーニング及びホームモニタリング

apneaがSIDSの中心病態でない意見が中心となり、またSIDSとALTEは異なった疾患の可能性があること（1145）などから、SIDSハイリスク児のスクリーニングに関しては、否定的な意見が多い。(1115、1141、1116、1183)。ALTE群のみをみても857例中実際にホームモニターの適応となったのは125例、14％に過ぎなかったとされている。(1142) それ故、ALTE群、SIDSの同胞を全員モニターすることは適切でないという意見が中心となり、一方ホームモニタリングに対する家族の心理的な問題、運用における実際面の問題

など、まだ解決すべき問題が残されていることが取り上げられている。(1118、1134、1190、1123、1203)。

4．その他

SIDS で児を失った家族の反応に対し、母親は父親よりも深く悲しみの状態にあること、児の死亡年令によって悲しみの程度が異なること、病院内での死亡よりも家庭内での死亡の方が、より精神的に打撃を与えること、児及び SIDS は、死産や新生児期死亡などの周産期に児を失う場合よりも悲しみの程度が深いことなどが示されている。(1171、1172、1173)。

(本文中の引用文献番号は、SIDS 研究班共通番号である。)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:本研究年度に Index Medicus 及び医学中央雑誌にみられた SIDS 関連文献(和文 7、英文 86 の計 93、文献番号は 1114～1206)について最新の動向を検討した。
SIDS の疫学研究においては、その発生頻度は従来と変わらず、また国別による差が著明であった。病因、病態においては特に新しい知見はみられないが、呼吸中枢の発達、適応、異常に研究の焦点がしぼられつつある。